

「今すぐにでも、ということでは、春先に増えるであろうバーベキュー関係のゴミに対して、どう先手を打つか、というのがあります。これをうまく抑え込めれば、今後の取り組みも違ってくるだろう、と個人的には考えてまして・・・」

道ゴミや街ゴミなど、いわゆる陸ゴミが川に流入して、という話もなくはないが、発生源がハッキリしているのがあるなら、それが優先。策も講じやすい。話を広げておいて、また収束させる、そんな進め方には異議も出そうではあったが、これが千歳の考える、飛び過ぎないTo-B論なのである。

ケータリングも頼んではあるが、ゴミ減らしがどつのとやった後でゴミになるようなものはあまり振る舞えない手前、できるだけ自前で大皿料理などを出すべく、文花は仕度を始める。休憩時間以降は、出たり入ったりで落ち着かなかつたが、そろそろ事務局長のお役回り came たようだ。

「では、この辺で河川事務所向けに移るとしましょうか。先月の会合に続き、石島課長にお出でいただいておりますが、いきなり話を向けるのも何なので、まずは届いたばかりの回答書の中味を伺ってから、ということ。えっと、代読がいいですかね？」

「あ、ハイハイ。じゃこは私、矢ノ倉からお話しします。石島課長、これ確かに拝受しました。ありがとございました。干潟における自然再生工事の件、回答書を要約して読み上げますね。」

文花はエプロンをしたままなので、パツと見は「おや？」となるのだが、話は至って真面目。注目されていることがよくわかるので、舌も滑らかである。

概括すると、再生工事は凍結、引き波や漂着の状況については調査を継続、崖地の崩落箇所は何らかの保全を試行、そして、

「若干の予算が確保できたので、ゴミ発生予防策など、より有効な用途に、との」回答を頂戴しました」

「おう石島さんよ、なかなかやるじゃねえか」

「ハハ、こいつはどうも。これも皆さんのおかげです。」

どうやらセンター理事連名での見解書が物云ったようである。行政側は、然るべき書面が来れば職員も話を通しやすくなるし、案外動きが良くなるものなのだ。どう使つかを検討するのはこれからだ、まずはめでたい。どことなく拍手が起こり、次女も嬉しそうにしている。会議スペースの陰では、いつの間にもやら細君が佇んでいて、丁度聞き耳を立てていた

ところだった。「ホホ、良かったわね。課長殿。」

さて、こういう展開になると俄然、物申すシートも生きてくるというもの。弥生は一応、要望のいくつかを打ち、映しているが、いま二つピピと来ていない様子。

「そうですね、メーカーに物申せるのがまた別の省庁ってことだと、ちょっと噛み合わないですね。となると、やはり現場レベルでの対策が中心、かぁ・・・」

膠着しかけたところで、途中提出されたシートの中に、面白いのが混ざっていた。

「えっと、巨岩に縄を締めて、棄てられそうな場所に安置、へへ」

「ああ、以前、掃部先生からも聞いたことがありましたね。場を浄める上でも有効、されど・・・」 浄めと来れば、清さん。

「ま、やらねえよりはいいかもよ。秋の大水で上流からゴロゴロ転がってきて、持て余してんのかあんだろ？」

「ええ探せば何処かに。じゃ、それを試しにバーベキューエリアに設置してみましようか。」 小梅はここで課長に入れ知恵をする。「ねえ、二見の夫婦岩、真似てみたら？」 「二つあれば、な」 父と娘の静かな会話が交わされる時、プレゼンター席では騒々しいことになっていた。一案出たところで、さらに、と行きたかったが、

「そつそつ、最初に分けた他はどうすんの？ 『厄介』と『不法』？」

「何が要望が出てれば、だけど。そういうのある？」

「人任せ？ 千さんだったら、ちゃんと考えてあんでしょ！」

見かねた櫻が引き取る。

「皆さん、すみません。ちょっと中断します。そうですね、三分後、十六時五分に再開つていっど。」

思わぬ展開に千歳はキョトンとしているが、とりあえずは救われた恰好。櫻は弥生以上にピリピリしている。

「弥生ちゃん、そんなに突っ込まなくても・・・」

「だって、何かスッキリしないで。この際、でしょ？ 不法はやってもいいと思う。」

「事件性があるのは別としても、それが河川事務所の仕事だもんね。やって当たり前とか言わずに、ちゃんと訊いた方がいいか。」

スクリーンには、箇条書きの続きで、

・不法投棄も存在する

と、A-1sの一文が追加される。これに照応しそうな要望として、水上からの監視を、というのが挙がってはいた。だが、これは芽を摘む上ではよしとしても、根本的な解決のため

の決定打とは言い難い。そこはあえて伏せておいて、協議に付すとするか。

ともあれ、この「不法」にまつわる「ロイヤリティ」は、広範な論議を呼ぶ可能性がある。はじめにカテゴリー分けして「大量」に絞ったのは、一定の帰結でとどめ、確実なソリューションを得たいとする千歳なりのプロセスマネジメント、そのものだったのである。弥生には、この協議手法自体が解の一つという理解が及ばなかったことが、もどかしさにつながっていたようだ。

この間、京は小梅を呼び出して、文花の仕度を手伝うよう促す。これで人手不足は解消。男手の一つも欲しいところではあったが、それはあとのお楽しみ。今のところは女性三人、仲睦まじく、でいいのである。

余裕の進行だった筈だが、やや押せ押せ感が出てきた。こうなったら、このままとめにつなげよう。千歳は覚悟を決め、まず課長殿に振る。

「で、不法投棄についても、岩を鎮座させることで予防できそうな気もするのですが、石島さん、どうですか？」

「取り締まりや監視は常々やってはいますが、さらなる予防策ということでしたら、それでもいいかと。監視カメラ取り付けるよりも安上がりですね。」

「監視強化については、要望の中にもありました。ただ、ここはやはり棄てさせない環境づくりが先決なのかな、と思います。看板を設置しても流れてしまっただけでは仕方ないので、置物を、というのは良さそうです。でも、もうちょっと妙案があるような気がします。ここはご当地でクリーンアップ経験のある皆さんに聞いてみるとしましょうか。じゃ、五十音順で蒼葉さんから。」

「え？ 私？ そうですねえ、できるだけマメに片付けるってことでしょうか。千瀧や川の本来の姿に近づけるっていうか、ピカピカになってれば、そうそう捨てられないでしょうから。」

こんな調子で、nigata@各位からの声を集める管理人である。生でメーリングリストを交換し合っている、そんな案配。櫻が続く。

「地域の実態をしっかりと把握して伝えること、かなあ。ここにこんなゴミが、とか、ここが投棄されやすい、とか。住民はしっかりとチェックしてるぞ、ってのを発信する。マップにして掲示すれば少しは予防になるでしょう、ね。」

文花は後回しで、冬木の番。「やっぱり情報誌等で呼びかけるなり、喚起するなりってことでしょか。あとはソーシャルビジネス、あ、いや失敬。わかりにくいですね。」そして、南実。「ゴミだって思うから棄てなくなるんでしょね。家電製品は有価物の塊。電

子機器は貴金属の集合体。プラスチックだって石油が枯渇したら貴重品ですよ。逆転の発想というか、社会的風潮を皆で作るってのはどうでしょうね？」

「こういう流れだと、八広も話し易い。発言がなかった訳ではないが、何となく低調だった弁論家は、ここで一気呵成に語り始める。

「今の話を継ぐなら、人の心理に訴える手が考えられますね。極端な例で言えば、どうもゴミを捨てる人が増えているらしい、という風評作戦とかスね。捨わないのが少数派ってのがわかると、どっかの国民は多数派に転じようと思えますから、それを利用する。つまり、捨てる手を増やす。あとは、ゴミの投棄が、自分に跳ね返ってくることを説く。目の前からゴミは消えても、心の中にはゴミが溜まるって話です。本人はスッキリしたつもりでも、その裏で蝕まれる何かがある、なんてのが広まるよ、効き目あるんじゃないスか？」

会場は水を打ったようになってしまつが、これは予定調和。弥生の毒舌トークが輪をかければ、さらにひんやりと引き締まっていいるだろう。と、思いきや、文花が小梅を連れて戻って来た。

「私もいいですか？」

「あ、ハイ、どうぞ」

「その、地球環境以上に、地域環境を見つめる目というか、市民の皆さんがここはいいところだ、って認識を高めてもらつてることが何よりの予防になるような気がして。ね、櫻さん？」

「ええ、ご近所の何とか力つてもありますが、一般的には地域力って言いますかね」

「あとは現場力ですよ？」

小梅がさらりと言つてのける。衆目が注ぐのを受け、さらに長めの一言。

「わたくしは、生き物にとって快適な環境は、人にとっても同じく快適、ということをより多くの人々が知ること、ではないかと考えます（へへ）」

トーチャンが目を丸くしたのは言つに及ばず。会場からは割れんばかりの拍手が起る。

「igaの面々はむしろ当然という面持ちだが、やはり頻りに手を叩いている。大人の話し方を聞き入っているうちに、自然と身につけたようだが、それにしても大した弁舌である。

「こうなると、弥生は下手なことを話せない。どう出るのかとメンバーは興味津々だったが、地域の実情をデータ化して、素早く広める、あたし、やってみます！」 何と自ら名乗り上げてしまった。解決策は自分で、これぞ究極のソリューションである。すっきりした顔で会場を見回すと、目が合つ人全てから熱い拍手が送られる。彼女にもう迷いはない。

さすがはiga各位、現場経験に裏打ちされているだけのことはある。自ら設定したまとめではあったが、あまりに上々だったため、新たに言葉を探さなければならなくなる。千

歳は窮々としながらも、紡ぐように話し始める。

「ありがとうございます。今のような思いや考えを一人ひとりが持つこと、実践すること、そしてとにかく現場へ、ということになるでしょうか。干潟も川も生き物もきつと笑顔で迎え入れてくれると思います。自然が微笑む場所には、きつとゴミはなくなっている、そう信じています。」

抽象的ではあるが、やはり経験が為せる業か、説得力を感じさせる。と、同時に実にエモーションナル。曲のテーマがこういう形で見つかることになるうとは・・・ 本人もビックリである。スクリーン末尾には「・不法投棄も存在する 防ぎ方はいろいろある 現場力や地域力、それらを育む思い・考え・行動・・・」と表示される。

「隅田さん、皆さん、どうもありがとうございます。もう一度、拍手を。」

余韻とゆとりを残しつつ、閉会予定時刻が近づく。清と緑、両作家先生に講評を求めるも、「いやいや、そういうのはまた新著で、な。とにかくこういう人達がいる限りは安泰ぞ。」

「そんな、初心者に訊いてどうすんのよ。こっちが教えを請わなきゃ。オホホ」
てな具合。櫻は渋い表情を浮かべつつも、司会としてのまとめに入る。

「長丁場になりましたが、いかがだったでしょう？」とにかく今回の協議内容についてはしつかり次につなげていきたいと思えます。要望は再度整理して意見交換の場に、ホームページなどでも紹介したいですね。で、現場ということでは、来月二月三日。耐寒クリーンアップを予定しております。センターの講座としては、定例ですと二月九日になりますね。」

部会の設定が模索中なので、それと連動する講座の内容も未決定。ただ、こうした客がいる今を逃す手はない。部会よりも実際のニーズありき。ご希望に沿ったプログラムを決めるには正に好機なのである。

「で、次回なんですけど、春のクリーンアップの企画検討を兼ねた実践講座なんてのはどうかな、と。チームの皆さんのご都合にもよりますが。」

春のクリーンアップ、つまり四月の回をオープンイベントにするかどうかは合意がとれていた訳ではなかったが、話が出ていないこともなかった。

「いいんじゃないスか。自分が出ますよ。で、春のつてのは、やっぱり四月の第一日曜スよね。ちゃんと予定入れときます。」

「宝木さん、ありがとうございます。エドさんチームはどうですか？」

「ええ、その四月についてはちょっとしたイベントも併せて、って考えてますから。今日の話で言えば、地域力アップと発生予防にちなんだもの、ですかね。ステージとかも設置して。いけね。ま、詳しいことはまた追い追いで。」

他のメンバーも前向き、会場の感触も概ね良好なので、二月の予定はひとまず決定。

「二月三日は、講座の前座みたいになりますが、あえて、ぶっつけ本番スタイルにしようと思います。持ち物や注意点などは改めてお知らせします。で、いいですよね、隅田さん？」

「はいはい。ただ、耐寒もありますが・・・」

プロジェクトはまだOFFにしていなかった。スクリーンには「体感クリーンアップ」との題字が打ち出される。「ぜひ体張って実感していただければ」と。そんな心積もりで越してください。チーム一同、お待ち申し上げます。」

「八八（やられたぁ）、そういうことで、よろしく願います。で、最後に事務局長、ってまたいなくなっちゃったんで、ここは一つ、石島課長、一言よろしいでしょうか？」

「あ、いや、皆さんどうぞお手柔らかに。何かございましたら、また。いや、今日この場でも構いません。次女もついてますんで。」

「エへへ」

親子で頭を下げている。こんな閉会の挨拶があってもいい。満場の拍手で以って、ゴミ減らし協議、終了。次はお待ちかねの新年会である。